

国内での日本語教育と海外での日本語教育 ④

文化活動としての日本語教育の展開

前号では、パリの日仏文化協会を例に文化活動としての日本語教育について述べたが、これは歴史的にも古く、教内ではこれらの活動が一つのモデルになっていると感じている。機会があつて、シンガポール天理文化センター、香港天理日本語学校、ニューヨーク天理文化協会、ブラジル伝道庁日本語教室、天理から日本語教師を派遣しているパラグアイの日本人会日本語学校を視察したことがあるが、それぞれの拠点へ送り出す人材の育成の上でとても勉強になった。やはり国によって事情は違い、効果的に派遣前の研修を行うには、共通の部分やそれぞれに違う部分などを考慮に入れていかなければならないことも感じた。布教未公認、あるいは公認の国で布教の糸口を見つけるための活動、また布教活動をバックアップするための活動や日本語教育をはじめ文化活動を通して直接的に布教するのではなく、いわゆるイメージアップのための広告塔としての活動など、その役割は地域ごとに違つとも言える。2011年10月には、日本語教育センターの業務として、海外拠点日本語教育施設長懇談会を天理教語学院で開き、現状報告や各拠点で行っている活動の情報を公開し、今後の活動に役立つように情報交換を行った。忌憚なく意見を出し合う場として、あえて会議とは銘打たず、懇談会という形式を取つたが、あらためて地域ごとの事情が違うことを感じた。意見交換をしても地域ごとの違いが浮き彫りになり、課題や問題点などを出してもらうだけで、その場の話し合いでは簡単に解決できないようなことが多かった。海外布教のための活動という点では皆、同じだとは言えるが、個々に対応していかなければならない課題も多いと感じた。

日本語学校がやはり一番

『海外布教伝道部報』第146号(1977年)に、「海外布教と本教の日本語教育」というパリ日本語学校についてのレポートがある。鎌田親彦パリ出張所3代所長のものであるが、昭和46年5月に開校後5年半が経ち、登録者数も700を数えるくらいになった頃の話のようだ。

文化協会の諸活動の最初に日本語学校を選んだ理由は、例えば茶道や華道に比べて、日本語学校は少数の限られた階層のみでなく、最も真剣に日本との接触を希望している人々を、最も広範囲に吸収でき、且つこれらの人々との長期間に亘る人間的つながりが期待できると考えたからである。

このように、文化活動の中でも日本語教育を第一に進めた理由を述べている。また今後の問題点についても二つあげている。一つは教職員の問題で、開校当初からパリ大学で教鞭を取る日本語教育専門家を外部講師として現地採用していたが、教外者であり、将来的には教職員全員を布教意欲に燃えるようばくで占めるようにしたいということである。もちろん教師としての素質と能力を備えた者で、信仰と日本語教師としての素養を兼ね備えた者でなければならない。筆者が派遣された1990年には、教職員は現地採用のフランス人職員を除いてすべて教内の者になっていたから、この問題は解決していると言える。もう一つの課題は、パリ天理日本語学校から日本へ留学希望するものを送り出せないことである。当時、天理大学選科日本語科があつたが、直属教会長が保証し、卒業後修養科入学を誓約した者が、一れつ会(奨学金)の扶育を受けて入学を許可されていたからである。

鎌田氏の考えでは、広く教外者にも門戸を開く方が長い目で見て布教につながるという考えを持っていたと思える。この問題も現在

では未信者であっても各拠点長が面談し、推薦する人を天理教語学院へ送り出していることを考えると、決して完全なものとは言えないが、時代はそれでもずいぶん変わって来ている。

天理独自の展開

宗教団体が行なっている海外での日本語教育の展開については、まだまだ研究が進んでいるとは言えないと思う。その中でも、創価大学の山岡正紀は1996年に天理を訪問し、「天理教における日本語教育の国際的展開について」(『創価大学比較文化研究』15、1997年)という論文をまとめている。その中で山岡氏は次のように述べている。

天理教は一種の社会貢献として、布教という最終目的とは直接無関係に日本語教育を行い、つまり大きな投網をかけ、その中から熱心に日本語を身につけた生徒を対象に布教を行うという手法を取っている。これは立場の違いにより、賛否両論があろう。布教という目的だけから考えれば非能率的である。一方で布教が達せられなくても純粋に言語教育の実績は残し、文化活動を通じて社会貢献をしていくことで、現地社会の信頼を勝ち得て融和していくことが可能である。長期的な視点から見れば、そのこと自体も結果として布教につながるとも言え、興味深い。(113～114頁)

山岡氏は天理教の日本語教育について関係者にインタビューを行い、全体的な天理教の日本語教育について客観的に調査していると感じる。確かに布教という目的だけから考えれば、非効率的であると筆者も感じる。山岡氏は結語で、「いかなる宗教においても、海外布教というものは、宗教的使命感に裏付けられた強靱な意志を原動力として、想像を絶する苦闘を繰り返しながら行われる、極めて人間的なものであろう。その意味で、日本語教育を布教戦略の一部として見ることはできたとしても、実際の海外布教に取り組んだ人々にとっては、それは枝葉の問題としか映らないことであろう。」と述べている。この論文が書かれた時から、もうすでに約20年の歳月が流れている。先人が過去に蒔いてきた種が少しずつでも実を結んできていると筆者は思う。客観的な数字だけを調べて、布教に繋がっているのかと言うのであれば、確かに教内でも賛否両論になるであろう。しかし、結論が出るのはまだ先であり、まだ前進している時期ではないのかとも感じる。

1990年11月頃のエピソードだが、岩切耕一文化協会長(当時)から授業見学を頼まれたことがある。日本語教育振興協会の理事の人たちだったと思うが、フランスの日本語教育機関を視察に回っていて、最後に天理日仏文化協会を訪問するとのことだった。気軽に請け負つたのはよかつたが、教室へ行くと後ろの方に座つた数人に、やや緊張したが、いつも通り楽しく授業を行なつた。その後、文化協会近くの日本料理店へ行き、会食となった。フランスのいろいろな日本語教育機関を回ってきたが、最後に日本語教育らしい授業を見せてもらったと授業見学の感想があつた。後になって国際日本語普及協会(AJALT)の西尾圭子氏や九州大学の柴田俊造氏だと知つたのだが、筆者が帰国して2年後、天理教語学院開校前に日本語教育振興協会の視察があり、その時、視察に来られた西尾圭子氏と再会した。天理教語学院が認可をもらう上で、パリでのできごとが役に立つかどうかはわからないが、天理教が日本語教育をしっかりとやっているという印象は持ってもらえたのではないだろうか。地道に国内、海外で日本語教育を展開していることが幅広く理解者を増やしているのではないかとも思える。